

鹿児島県

特産品協会だより



薩摩切子〜百年の時を越えて〜

薩摩切子は、透明なガラスに色ガラスを厚く被せ、カットを施すことにより、その境を曖昧にしてボカシ(グラデーシヨン)を出した被せカットガラスです。カットガラスというと鋭く冷たいイメージがしますが、薩摩切子はあくまで温かくまろやかで、南国育ちのガラスという感じを醸し出しています。

島津斉興が薬瓶製造のため、江戸切子の職人を薩摩に招いて作られたのが始まりといわれています。当時の日本では創り得なかった色ガラスの発色に成功し、無色のガラスに被せ、精緻なカットを施したガラス器の製作が進められました。こうして生まれた薩摩切子は、急速に技術的な成長を遂げその完成度を高めていきますが、事業を本格化した斉彬の急逝や薩英戦争、明治維新と続く歴史の中で姿を消してしまいました。

それ以後、薩摩切子は、幻のガラスといわれていましたが、その価値を惜しむ人々の努力で、1985年に復活されました。当時の技術を活かしながら、新しい研究も進められ、色も紅や藍、金赤に加えて緑、黄、紫、ルリと7色そろい、丹精こめた切子が次々に誕生しています。

最近では、2色被せや黒色の商品も開発され、タンブラー、小鉢、お猪口、ワイングラス、アクセサリなど種類も豊富になり、国内だけでなく、海外市場の販路開拓への取組も意欲的に行われています。



② いいものは必ず売れます……………

③ 読者だより……………

④ 流通最前線情報……………

④ 協会と手をつなぐ団体のご紹介……………

⑥ 元気印の仲間達……………

⑧ **連載** 哲也製 *の* 風光の魅力と人間の努力……………